

關西洋畫界通信(二)

紫 舟 生

大阪三越吳服店第七回洋畫展覽會、春も漸う深くなつて、花の香甘き三月二十日から十五日間大阪の三越で太平洋畫會と關西美術會合併の洋畫展覽會が開かれた、出品數は東西合して百五十點の豫定と聞いて居たが、扱て開會早々行つて見ると三百何點と云ふ大變な數になつて居た、尤も其中には吉田、中川、石川三氏の琉球スケッチ七十餘點も含まれて居た、狭い室に澤山の繪を無理矢理に押し並べてあるので、見るのに甚しく眼が疲れ、水彩の出品は七十餘點、例に依つて私の好きなのを舉げて見ると、石井柏亭氏の「コンスタンチノープルの雪」及び「ピアザの町外れ」藤島英輔氏の「松燒ヶ岳」小杉未醒氏の「釜山鎮」大下藤次郎氏の「甲州白峰」瀧澤靜雄氏の「居留地の夕」赤城泰舒氏の「深山の牧場」中川八郎氏の「菊畑」坂本繁次郎氏の「安竹村」等であつた、水彩にも油繪にもあまり大作は無かつた、小杉未醒氏の「白木蓮」が一番の大作として場中を睥睨して居る感があつた、小品ばかりではあるが、文展のよりに固くならないで、皆思ふ儘に個性が発揮してあるので如何にも興味が深い、その中でも齋藤與里氏や近藤浩氏等の作品は尠からず大阪の人々を驚かしたりしい。吉田、中川、石川三氏の琉球スケッチも皆眼新らしい景色丈に面白く觀たが、何しろ熱帶の強い色彩を隙間もなく並べてあるので、半分程見て行く内に頭がガン／＼

と痛くなつてしまつた、三氏の内では吉田氏が最も強烈な感じが現はれて居る様に思つた。大阪はこの頃大分洋畫趣味が勃興して來た、三越の此度の展覽會では、實に八十餘點の繪が賣れた、全體の二割七分は赤札が附いた、中には一人で二十點斗りも買つた人があるとの事だ、斯かる盛んな現象は到底東京でも見られない處であらう、たとへ其繪が眞に解つて買つて否とを不問繪が賣れると云ふ事は兎も角も畫家に取つて之れ丈心強い事はあるまい、三越展覽會は大なる成功を收め得たと云つてもよからう。

津田青楓氏主催繪畫展覽會 四月七日の日曜日、京都圖書館樓上に開會中の津田青楓氏主催の展覽會を見た、出品者の顔觸れは青楓氏を主として南薰造、柳敬助、有馬壬馬、齋藤與里、富本憲吉、高村光太郎、山下新太郎の諸氏、油繪、水彩の外に半折物の日本畫、陶器繪、團扇繪などもあつた、孰れも小品ばかりであつたが、白樺派の詩人的畫家のお揃ひ丈に、大分風變りな作もあつた、クラシカルな京都でこんな新しい氣分に富んだ展覽會を見やうとは思はなかつた、觀覽者の中には齋藤與里氏の日本畫や青楓氏の水彩畫が解らなくて困ると云つて顔をしかめて居る人も見受けた、私には矢張り南薰造氏の水彩が一番多く感興を牽いた、殊に伊太利か何處かの港の繪は忘れられない繪であつた。陶器畫や團扇の中にも奇抜な滋味たつぷりの面白いのがあつた。京都にもかゝる個人主催の展覽會が開かれる様になつたのは大に頼もしい次第である。

▽▽▽▽△△△△△△△△△△△△
日本水彩畫會關西支部第一回批評會 三月の第三日曜日豫定の如く批評會を京都銅鉦尋常小學校に開く、會するもの拾數名、朝來の雨にも拘はらず河合先生の來會あり、當支部の復興を祝し將來充分援助を與ふべき旨の挨拶あり更にアマチュアとしての覺悟に就き懇切なる御講話あり、次いで會員作品の批評に移り一々精細なる批評を加へらる、會員は充分の満足を表して散會したのは暮靄東山にこむる頃であつた。尙當支部は其後續々入會の申込みもあり、會員も倍加して來たから次會は更に盛會を見る事であらう。

生れた土地の關係

大阪 長谷川 利行

私の家は舊家であつて、廣い庭の奥には古濠があつた。養つて居た鯉などをよく釣つて遊んだ事がある、その時分、濃青な深遠な幽趣な、水の面を『青き印象』として、私の眼に今でもちらつて居る。更に近郊には大きい池があつて、初夏の頃より、葦が繁つて、藻の匂の懐かしい夜は、徳兵衛爺を伴れ出して、古ぼけた小舟に、小さい膝をちやんと並べて、棹さして貰つた事がある。

大池とは『淀の大池』と通稱されて、私は實に水に縁のある淀町で生れ、生ひ立つたのである。實際の生れは、伏見町の母屋に當る酒屋の倉で、オギヤアとやつたそつだ。その邊の消息は知らないが、生れた事は確實である。

學校に登るまでは、生れて七年といふ間は、幼稚な心懸にもせよ、水とは慕しみがあつた。

池の面に、赤や白の花が咲く、不思議と水の中で生きて居る魚や、機械を練つて居るやうに考へた波や、さまざまの幼年の疑質は多大の愛育心があつた。

冬は薄い板が張りつめるのを、徳兵衛爺に告げて、乳母に怒られる恐怖心を偲んで、食べた事も懐かしい、ついでに飛んでゆく水蟲を見て、坊も水の上に乗りたいなど、ダダを捏れもした。兄と同じ緋の着物を作つて貰つて、水を嬉こんだ五つ六つ時代は、わけもなく華やかであつた。慕しい懐かしい水の郷よ、ながながと追懷的な感覺を呼び起させる。

水面に描かれた倒影は、美しい、幼年時代の心の儘でありたい、ローマンズにならうとする、私の心を抑へても、ローマンズとなりたがるのは、自然の讚美者よりも、造詣深いわけであらう。

尋常科の一年二年になつた頃は、當時の何の意味もなく、蛇を見付けた感じてなく、蝶々が菜の花に片々として居るのを眺めた様に、身に快感を與へたのとは異ひ、半づぼんの洋服姿で、夏休に京都から歸ると、母や姉やと水黽をして遊び、當時思ひ出せないが、誰かにつれられて、あの心を引きつけられた水畔の美しい畫をついてゆくと、必と赤いのや、青いので描いてくれた様に思はれる。斯くの如く風土の關係から、十年十五年生ひ立つた私は、相變らず水の讚美者であつた。かかる境遇から